
夏がくれば。

翠龍

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夏がくれば。

【Nコード】

N5263H

【作者名】

翠龍

【あらすじ】

俺とあの人の思い出の場所。夏なのに思い出すのは冬のあの人が。今年もまた、会いに行こう。

嗚呼、どうしてなんだろう。

いつもいつも、そう思う。悲し過ぎるこの気持ちは…………。

雪のように溶けてしまえばいいのに。

俺の思いとは裏腹に、その気持ちはだんだん風船のように膨れていつて。

「今年も、また…………。」

夏が来た。

小さく、吐息がこぼれる。

『好きでした。あなたのことが。』

そう言っていたのは、三年前の春。

俺の好きで好きで、たまらなく愛しかった人は、他の人に恋をしていた。

「でも、なんで好きでしたって…………。」

どうして過去形…………？

それは美しい容姿の女^{ひと}だった。

今思えば一目惚れだったのかもしれない。雪解けを惜しむように、雪と触れ合うあの人。

その姿は今でもはっきり覚えている。その姿に、俺は惚れたんだ。雪に触れて、涙を流したあの人の姿。

夏がくると、何故か雪の中に一人たたずむあの人の姿が頭の中に蘇る。

ああ、そうか…………。

あの人は、三年前の夏に死んでしまった。

だから、夏だというのに雪の中のあの人が浮かぶのか。
納得した。すぐに。

そして自分の中にあつた気持ちがたまらなく憎い。

安心、してるのか……？

あの人が他の男と一緒にいる姿を見なくてすむ、と。

「あーあ、俺って最低……。」

なんだか自分が情けない。

「あつ……。」

ようやく気がついた。

適当に歩いてたはずなのに、そこに來ていた。

「ここは……。」

最初にあの人を見つけた場所。

あの人が見知らぬ男に告白をしていた場所。

そして、あの人が死んだことを告げられた場所。

「うわ、ここって今考えりや嫌な思い出ばつかじゃん。」

何故自分がここに来てしまったのか、全く見当もつかない。

「あ……そっか。」

俺は伝えに來たのか……。あの人に。

「大好きでした。」

ぽつりと呟いた。涼しい風が、吹き抜けて、俺の涙を擦った。

「さようなら。でも、忘れません。あなたのことは。」

あの人が亡くなった場所。
それもここで。

夏だというのに、吹雪いたあの日。

真っ白な雪の中に一人倒れたという。

冷たい雪は、彼女を愛してしまっただけ。

その冷たさで、彼女を留めようと、体温を奪っていたのだ。

これは後でわかったことだが、彼女が告白した男は土地神だったらしい。

土地神は俺が見たあの日のみ、人型になっていたのだろう。

彼の服にはその土地にある祠と同じ紋が描かれていた。

雪となって毎年、彼女と会っていたという。

「あなたも雪になったのですか？」

眩しい日差しは、いつの間にか雲に隠れていた。

「あなたは、あなたの愛した方と、共にいますか？」

俺は、あの人と土地の神様が、一緒に暮らすこの場所に、別れを告げた。

決まって俺は、あの人のことを忘れる。

夏が終わってしまった。

そして決まって、夏になれば思い出す。

冬の記憶、夏の寂しさ。

俺は夏にだけ、二人に逢える。

（後書き）

短編もの初です。

といっても初心者まるだしですが・・・。

今現在（執筆時）、まだ中学生なので、文章力が多少足りないかもしれません。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5263h/>

夏がくれば。

2010年10月9日06時05分発行